

青年期における性役割の認知*

東京女子大学

柏 木 恵 子**

問 題

人は男、女いずれかの自分の性に応じた行動、態度をとることを、潜在的にまた、顕在的に期待されている。この自己の性に応じた役割（性役割）を適切にとることは、望ましいパーソナリティー発達のひとつの主要な面であり、また、社会的適応のひとつだといえよう。

この性役割学習には、自分の性に期待されている役割がどのようなものかを認知すること、および、その役割を演ずることの2つの過程が含まれている。そしてこの学習は、子どもの出生以来遭遇するさまざまな社会的場面、対人関係のなかで果たされてゆく。親との同一視、とくに同性の親をモデルとする同一視は、その最初で重要な機会であろう。ついで親以外の他の同性をモデルとする模倣学習も生ずるし、さらには具体的人物ではなく抽象的なイメージをモデルとした学習によっても性役割は獲得されてゆく (Bandura, 1962, 1963)。この間の学習は個体の自発性に根ざした能動的なものから、外からの賞罰による強化学習の形をとることもある。つまり性役割学習は、モデルが何か、学習のしかたなどに関して多岐にわたっている (柏木, 1966)。

ところで、このような性役割学習の過程のなかで、青年期は独特の意味をもつ時期だと思われる。すなわち、幼時はいうまでもなく青年期以前の幼少の段階では、子どもは親なり他の人なり、自分に与えられたモデルを素直に受容し、このモデルの特性をとり入れ、これに接近しようとする試みがきわめて自然になされる。それは意図的なものというよりは、もっと受動的なもので、モデルからの感化ともいってよく、ここでは外側のモデルに同化し接近する試みが顕著になされる。ところが、こうした素直な児童がやがて自我意識に目覚め、これまで受動的にとり入れてきたさまざまな規範に批判の目をもつ

ようになる。のちには性役割についても同様に批判的になり、外的モデルを受容しその役割を摂取することをやめ、むしろこれに反発して独自の性役割像を形成するようになる。以前の、モデルからの受動的な性役割取得に比べ、ここでは主体的能動的な性役割の学習がなされる。

ところで、男・女の性に対して、それぞれどのような役割特性が期待されているか、いいかえれば、一般に“男らしさ”“女らしさ”とされているものの実体は何か、は、周知のことのようでいて、じつはかなりあいまいなもののように思われる。性役割がその社会、時代、文化により、いちぢるしく変動するものであることは明らかであり、特定の集団ごとにその実体が明らかにされねばならないだろう。さきに、性役割学習が児童期から青年期にかけてある変化が生じることを指摘したが、この変化は、その個体を含む社会、文化のちがいによることももちろんありうるが、しかしそれ以上に、自我に目覚め、主体的能動的な自己形成をしてゆく青年の発達の過程としても注目すべきだと思われる。

本研究は、このような視点から性役割学習を扱うが、とくに性役割の認知の面に焦点をあて、そのために文化的社会的条件のほぼ等質と思われる男・女青年集団について発達的な検討を試みた（性役割を実際に演ずる面についてはここでは扱わない）。ここで目的としたことは次の点に要約される。

1. そこでは男・女の性役割がどのようなものとして認知されているか。
2. 男・女の役割にどのような差が与えられているか。
3. 青年期の前中後の3時期間に、どのような変動がみられるか。
4. 男子青年と女子青年との間に性役割の認知にどのような差がみられるか。

方 法

成人および青年を対象に、“望ましい男性”“望まし

* An investigation concerning the cognitive development of sex role in adolescence.

** by Keiko Kashiwagi (Tokyo Woman's Christian College)

い女性”についての自由記述を求める予備的調査をおこない、その資料から、男性・女性の役割を記述するのにふさわしい特性を示した形容詞を選出した。さらに、Bennet et al. (1959) がアメリカでおこなった大規模な調査から、前述の手続きでは得られず、かつ日本人にも適用可能な項目が選択されて、本調査のための質問紙が構成された。それは、身体的面から知的、性格的、社会経済的面までさまざまな領域にまたがり、相互に重複のない形容詞対34項目から成っている (Table 1)。

Table 1

1 背が高い	18 頭がよい
2 活発な	19 忍耐強い
3 積極的な	20 個性的
4 気持ちのこまやかな	21 家庭的
5 経済力のある	22 自信のある
6 おしゃれな	23 従順な
7 意志強固な	24 社交的な
8 行儀よい	25 謙遜な
9 融通性のある	26 容貌の美しい
10 健康な	27 女性をリードする 男性に依存的
11 線の太い	28 現実的
12 質素な	29 理想をもった
13 愛情豊かな	30 学歴のある
14 視野の広い	31 道徳的な
15 かわいい	32 指導力のある
16 理性的	33 女性を認める 男性に一目おく
17 仕事に専心的	34 政治に関心のある

被験者は、以上の各項目ごとに、その特性が男性にとってどの程度望ましいか、また女性にはどの程度望ましいか、について、7段階評定が求められる。すなわち、各項目ごとに、最も望ましくない、非常に望ましくないやや望ましくない、どちらともいえない、やや望ましい非常に望ましい、最も望ましい、の7段階のスケールが示されている。そして、男性について、と、女性について、の2つの評定を、この7段階いずれかの点にチェックするよう求められる。この際、被験者は、同一項目において、男女の両役割を相互に比較しながら評定チェックするように教示される。

被験者は、男女とも、中学1年 (12才)、高校1年 (16才)、大学2年 (20~21才) の3年令段階で、いずれも共学でない東京都内の私立男子系の学校、女子系の学校からそれぞれ選ばれた。ただし、男子大学生群だけは国

立大学で、女子学生のきわめて少ないコースの学生が選ばれた。各群ごとの被験者数は Table 2 のとおりである。

Table 2 被験者

性	年令	中学1年	高校1年	大学
男	子	30	50	50
女	子	50	50	50

結果と考察

1. 概 観

以上の手続きによって各被験者から34の質問項目に対して、男性としての望ましさを、女性としての望ましさを2つの評定が得られた。この2つの評定は、被験者が各項目で示された特性について、男性の役割としてどう認知しているか、また同じ特性が女性の役割としてはどう認知しているかを、それぞれ示すものと考えられる。これを以後、それぞれ、男性役割得点、女性役割得点と名づけることにする。

さて、男女の性役割の認知の様相を明らかにするために、同一被験者の男性役割得点、女性役割得点と比較し両得点間の差の検定を項目ごとにおこなった。この検定は、性、年令を異にする6群ごとにおこない、各群ごとの性役割認知の特徴が分析されたが、まず最初に6群を通じての全体的傾向をみよう。全34項目のうち、男女両役割得点間に有意差の認められた項目は、各群によってそれぞれ多少異なるのであるが、いくつかの項目においては、6群に共通であった。すなわち、各群ごとの差の検定結果を対応してみたところ、いずれの群においても等しく男女両役割得点に有意差のある項目と、両得点間に差のない項目とがあることが明らかとなった (Table 3)。

Table 3

	項目数	項目内容
6群に共通に有意差のある項目	5	1. 背が高い, 2. 活発な 7. 意志強固な, 8. 行儀よい 17. 仕事に専心する
6群に共通に有意差のない項目	5	9. 融通性のある, 10. 健康な 20. 個性的, 24. 社交的, 31. 道徳的

ここで男女両得点間に有意差が認められたということはその項目特性に関して男性としての望ましさを度合いと女性としての望ましさを度合いが異なることを意味している。いいかえれば、どちらか一方の性において、より高く望ましいと認知されているといえる。つまり1, 2,

7, 8, 17の5項目は、どの群においても等しく男女いずれかに、より高く期待されている特性だといえる。これに対して、男性、女性いずれに対しても同じ程度の望ましさを認知していれば、その項目についての男・女両得点間には差が認められないことになる。つまりその項目は男女の性役割を識別するような特性ではないことになる。9, 10, 20, 24, 31の5項目の特性は、男女にほぼ等しい期待がもたれていて、男女いずれかの性役割を示す特性とはいえない。

ところで、このように有意差があるにしろ、差が認められないにしろ、項目に対する男・女両得点間の関係が全6群を通じて共通なのはTable 3に挙げられた10項目で、これら10項目については、どの群でも同様な評定がなされているといえるが、残る24項目においては、ある群では有意差があり、また他のある群では差が認められない、というように、6群の間でそれぞれ異なった結果が見出されている。このことは、性役割の認知のしかたには、6群を通じていくらかの共通性をもちながらも、反面、各群ごとにそれぞれ異なった特徴があること、そして性・年齢を異にする群ごとの分析の必要性を示唆している。

ところでこれまで男女両役割得点間の差の有無だけについて論じてきたが、この差の方向、つまり男女いずれの得点が有意により高いか、をみると、女性役割得点が高いのは、8（行儀よい）の1項目のみで、他4項目はすべて男性についての評点が女性についての評点より有意に高い。いったい、男女両得点を比較してそこに差があるということは、何を意味するのだろうか。男性得点が高いと有意差があることは、その項目の表示する特性が男性により高く期待され、望ましいと認知されていることであり、その特性は男性的特性といってよいであろう。逆に女性得点が高い場合は、その特性が女性に強く期待され、女性に望ましい特性として認知されていることである。

全6グループを通じて共通に有意差が認められた5項目が、大半、男性役割得点が女性役割得点より高い事実は、次の点を示唆するものと思われる。すなわち、中学生から大学生の年齢範囲にわたる男・女の被験者が、男性と女性の役割を識別する場合に、これら5項目をひとしく有効な次元として用いていること、しかも、その項目特性は、いずれも男性の側により強く期待されている特性であること、つまり、男性に期待する特性、男性的特性が、男女両性を識別するときの手がかりとなりやすいこと、などである。さらに、いいかえれば、男性、女性の役割の認知は、男性についての方に、より多くの特

性が付与され、より明確な形で認知されている、といえるのではなかろうか。このような事実は、いうまでもなく、この質問紙を構成する34項目が、すでに男女の特性をほぼ半数ずつ表示するものではなかったことと関係があるろう。しかし、男女両役割得点間に有意差の認められる項目の多くが、男性の特性を示す項目であるという事実は、単にここでの項目編成の偏りにのみよるとは考えがたい。

質問紙作成の基礎となった予備調査において、多数の被験者から挙げられた莫大な項目においても、男性の特性として挙げられた項目が、女性の特性項目よりもはるかに多かった。これらの事情を考えあわせると、やはりこの調査対象における男・女の性役割の認知は、男性に対して、より多くの特性が積極的に与えられる傾向があるといえるのではなかろうか。逆にいえば、女性に対しては男性と比べ、積極的に認められる特徴的な特性はずっと少なく、むしろ“男性的特性を欠く”ことが特徴だともいえるべきもののように考えられる*。さらに極言すれば、男性に対しては、多くの好ましい特性、資質・能力が期待されているのに比べて、女性に対する期待は小さく、その役割は消極的な、より小さなものとして認知される傾向があることを示唆しているのではなかろうか。

2. 男 女 差

いま、いくつかの点について、全6群を通じてみられる全体的傾向を指摘してきたが、これを次に、年齢段階はいちおう無視して被験者の性別に吟味してみよう。男・女両役割得点間の有意差の有無およびその差の方向はTable 4のとおりである。

Table 4

	3群(中・高・大)に共通に有意差の認められる項目数	差の方向**		3群に共通に有意差が認められない項目数
		m > f	m < f	
男子群	7	5	2	8
女子群	15	11	3***	7

* たとえば“活発ではない、意志強固ではないの”が女性である”というふうに。

** 男性得点が高い場合を m > f 女性得点が高い場合を m < f と記す。

*** m > f, m < f の合計が総数 15 と合致しないのは、どの群でも有意差はあるがそのうち1群で差の方向が逆で、3群に差の方向が一致しない項目が1項目あることによる。

さきにみた全6群に共通した結果と比べると、有意差のある項目、ない項目とも増し、男女別の各群内での共通な傾向は一層顕著になっている。ことに女子3群間においては、一致の傾向がより著しく、全34項目中22項目において、いずれの群でも同様の結果が得られている。このことは、女子の中学・高校・大学3群が年令を異にするにもかかわらず、性役割の認知に関してかなり類似したものであることを示唆している。これに比べると、男子では、中学から大学までの3年令群の間には、女子よりも一致は低く、年令段階を異にする群ごとに性役割の認知のしかたはかなり相違があるのではないかが疑われる。ところで、この男子群間に共通に有意差のある項目が少ない事実は、主として中学群の極端な結果に拠っている。それはのちにあるように、この男子中学群は、有意差のある項目が全6群中最も少ないことが特徴的である。だがこれが、中学段階の男子を特徴づける一般的な結果であると結論する前に、いくつかの疑問が残されている。すなわち、(1) この調査における男子中学群の被験者数が他の群よりも小さいこと、(2) この被験者が他の群に対して特殊なサンプルではないか、ことに同じ中学段階の女子群と比べて知的水準がやや低い被験者ではないか、そのために同一特性について男・女の両役割を比較評定するという、求められた教示がむずかしく、再評定が無差別になってしまったのではないか。さらにもうひとつ可能な見方としては、(1)、(2)で指摘したようなこのサンプルの偏りによる結果というよりは、低年令段階では男子が女子よりも発達が遅れるという、一般的な現象の、やはりひとつのあらわれとみなす見方がある。

このいずれが妥当であるかは、新たな被験者による資料も必要であろうし、また別な方法によりこのサンプルの等質性について吟味することも加えて、今後検討すべき点のひとつであろう。ただ男子と女子とでは、同じ中学生から大学生に到る青年期にありながら、性役割の認知の変動のしかたにやや相違があるらしいことは指摘できるだろう。これがどのような相違であるかを、次にいくつかの点から明らかにしよう。

3. 年令段階による変動

まず、これまでと同様の処理のしかたによって、男女両役割得点間に有意差のある項目数およびその差の方向を、男女の中・高・大各年令群ごとに表示したのがTable 5である。

Table 5

	男 子			女 子		
	中学	高校	大学	中学	高校	大学
両役割得点間に有意差の認められる項目数	11	17	24	22	21	22
差の方向	m > f	7	12	16	17	15
	m < f	4	5	8	5	6

まず有意差のある項目数に関して、年令を異にする3群と男子女子それぞれについてみよう。まず男子では年令の上昇にともなって有意差のある項目数は漸次増加する。このことは、男性および女性の役割をどのようなものと認知しているか、両役割をどう識別しているか、といった点に関して、男子は年令段階によって差があることを示している。すなわち、年少の中学段階では、男性・女性の性役割は、年長レベルに比べると、数少ない、ごく限られた特性でしか区別されていない。ちなみに、大学生の場合の半数に満たない項目においてしか、男・女役割間の差は認められていない。いいかえると、役割の分化の程度が低いといえる。これが、高校、さらに大学となると、しだいにより多数の項目が男女両役割と区別するのに有効に用いられるようになり、両性の役割はそれぞれかなり異なったものとして分化して認知されてくる。

これに比べて女子の3群では、少なくとも有意差の認められる項目数に関しては、年令段階による差はみられず、いずれの群でもほぼ同数の項目に有意差が見出されている。ただしこれらの項目は、中・高・大の3群間で完全に対応、重複してはいず、内容的に多少の異同があり、全3群に対応のある項目は13項目である。つまり、内容的には多少の相違はあるが、少なくとも男・女両役割を区別し分化させる程度については、どの年令もほぼ同程度であるといえよう。

Table 6

各群における有意差のある項目数	群の組合わせ 中学女子群・大学男子群		高校女子群・大学男子群		大学女子群・大学男子群	
	21	24	21	24	22	25
両群ともに有意な項目数	19		19		20	
大学男子群のみに有意	5		5		4	
女子群のみに有意	3		2		2	

この女子群は、さきの男子群と比べてみると、男子群中、役割分化のもっとも進んだ年令の大学群にほぼ等しい。いま、有意差のある項目数がほぼ等しい男子大学群と女子の中・高・大の各群との間の、独自の異同関係に対応させてみると次のようになる (Table 6)。

これによると、女子の中・高・大3群がそれぞれ大学男子群と少なくとも共通に有意差をもつ項目数はほぼ等しい。これは女子では、どの年令段階においても大学男子群と内容的にみても、かなりの類似性をもっており、役割分化に有効な項目数に関しては、ほぼ等しい水準にあることを示している。そして、女子の青年においては男子に比べてずっと早くから男・女の性役割をこまかに識別しており、分化のすすんだ役割観をもつに到っていることを示唆するものと思われる。

ところで、いま、各群において有意差のあった項目をその差の方向別にみると、ややちがいがあることがわかる。ことに項目総数においてほぼ等しかった女子の3群は、この点からみると必ずしも等しくない。 $m > f$ と $m < f$ との別は、少なくとも中・高2群と大学群とではやや異なっている。すなわち、大学群では $m < f$ の項目が他の2群よりずっと多い。

このことは、中・高の段階では、男・女両役割を識別する場合に、男性に望ましい特性——男性の役割特性——がまずクローズアップして捉えられ、この特性の有無によって男女を区別するというかたちをとっている。ここでは、女性の側に望ましい特性——女性の役割特性——というもの、まだそれほど明確に識別され捉えられてはいない。これに比べて大学生になると、男・女の性役割を識別するにあたって、男性特性によるほか、女性に期待する役割特性も、より多く積極的に認知されるようになってくる。このことは、大学以前の段階では、男性的特性をもつもの (男) とそれを欠くもの (女) という形で識別されているにすぎないが、大学生段階に到ってようやく男性的特性をもつ男性と女性的特性をもつ女性、というふうに、それぞれの

性に独自の特性が明確に把握認知され、この特性を基準にして男女を識別するようになることを意味するのではなからうか。

ただ、このような年令段階にともなう変動が、はたしてここにみたように女子青年だけに特徴的なのか、あるいは男子にも該当する傾向なのかは、この調査結果からは結論しがたい。男子3群間では、有意差のある項目数そのものにすでにちがいがあって、差の方向に関して群を比較することはできないからである。しかしこのことは、男子では、女子群にみられたように男性的特性だけによる男・女の識別から、男性・女性それぞれの特性の認知およびそれによる男女の識別といった認知のしかたについての变化よりも、むしろ、識別の程度、ないし認知の分化度そのものに中学から大学の間に差があるといえるのではなからうか。端的にいえば、男子と女子とはそれぞれ異なったかたちでそれぞれ年令にともなう変化がある。女子群における年令の変動は次にみる項目の内容分析においてもみることができる。

これまで男女の性役割の分化に有効な項目数、およびそれが男・女いずれの特性を示す項目か (差の方向) の

Fig. 1 項目内容の年令間対応 (男子)

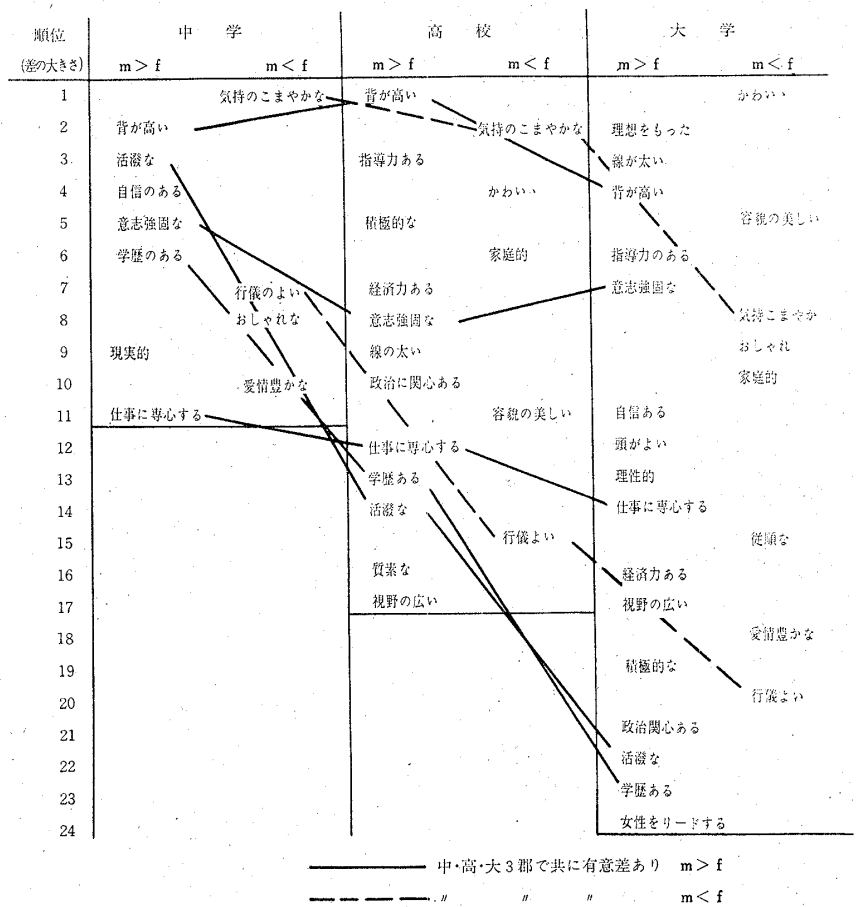
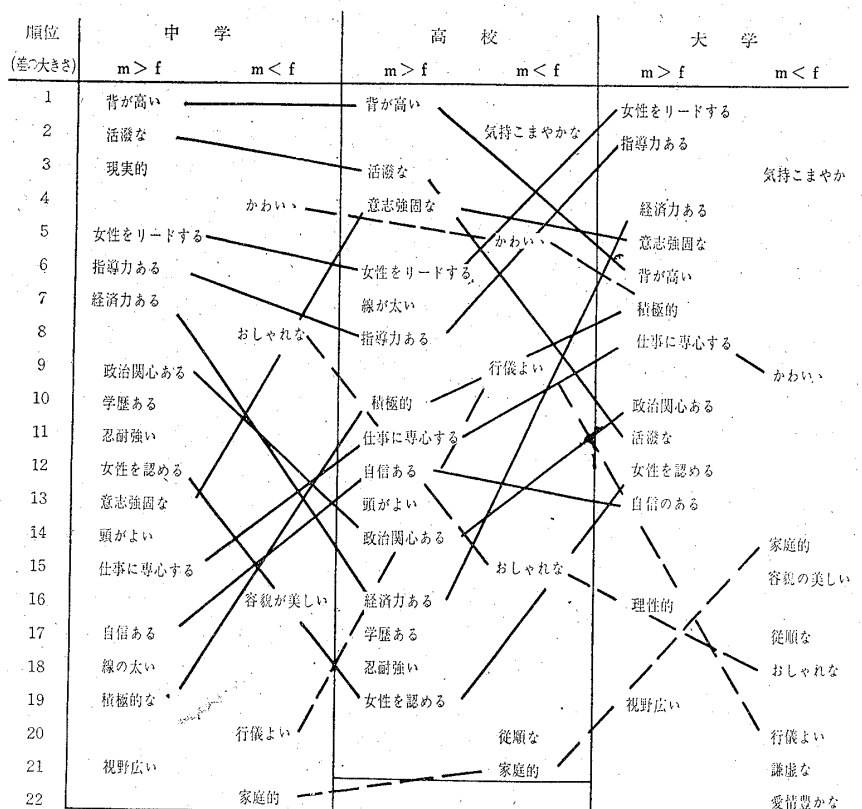


Fig. 2 項目内容の年齢間対応(女子)



点からみてきたが、さらに項目の内容にたち入って検討してみよう。男子群、女子群別に有意差の認められた項目内容が中・高・大の3群間にどう対応があるかと表示したのが Fig. 1, Fig. 2 である。

ここから男子群、女子群にそれぞれ次の諸点が注目される。

まず男子ではさきに指摘したように、中学から大学へと有意差のある項目数は漸次増加するから、当然のことながら大学生での項目はもっとも多岐にわたり多様なものを含んでいる。一方、項目数の少ない高校・中学群における項目は、その大半が大学群の項目と共通であり、大学群に対応のない項目はわずかに1項目ずつあるにすぎない。さきに、男子の低年齢段階では男・女の両性はより少ない限られた特性で区別されていて、年齢の上昇にともなって漸次分化してゆくことを述べたが、その低年齢では、内容的にみてその段階だけに固有な特性が認められることはほとんど稀なことがここからわかる。つまり、年少段階は後の大学生段階にはみられないような特異な項目特性が男・女両性の識別に使われている、ということはない。したがって年齢上昇にともなって項目が増し、漸次分化してゆく過程には、質的な転換、内容的な変化はなく、むしろ中学段階から有効であったいくつ

かの数少ない特性に加えて、新たな特性が順次付加され、性役割の識別に有効な次元が広範化してゆくかたちをとる、といえよう。

一方、女子3群について同様の検討を行なってみると、いまの男子群の場合とはやや異なっている。ここでは有意差のある項目数は中・高・大いずれの群においてもほぼ等しいが、その内容を対応させるとそのうち15項目は全3群に共通している。一方、各群のみにみられる項目はそれぞれ、中学で1(現実的)・高校で0、大学で3(理性的、愛情豊か、謙遜な)である。このかぎりでは、男子の場合と同様に各年齢段階に固有の特徴はなく、むしろ中・高・大の3段階は有意差のある項目数が等しいばかりでなく、内容的にもかなり等質なもののように考えら

れる。つまり女子においては中学の段階ですでに大学生とほぼ同様なものとして性役割を認知するに到っており、中学から大学の間大きな年齢の変動はないように思われる。しかし、いまとりあげた項目、すなわち3群に共通する項目、20、および1群のみにみられる項目以外の他の項目がどの年齢群にどう分布しているかをみると、大学群にみられず中・高群の2群だけに共通する項目がいくつか存在すること、(男性に対する、「頭のよさ」、「学歴」、「線の太さ」、「忍耐強さ」) 逆に中学群にはなく高・大の2群に共通するもの(女性に対する、「気持のこまやか」、「従順さ」) もあることが注目される。このことは、やはり年齢の変化に応じて性役割に対する認知のしかたに相違する面もあり、低年齢段階に特有な男性に対する役割認知、高年齢になって生ずる女性に対する役割認知が、それぞれあるらしいことを示唆している。そして、さきに差の方向から女子群の年齢変化をみた際にも注目された事実——低年齢では男性的特性の有無によって男女を識別するが、しだいに女性的特性も捉えるようになり、男・女それぞれの性に独自の特性を明確に認知するようになる事実——を裏がきするもののように思われる。

さて、項目内容についての検討の最後に、これまで別

々に扱ってきた男・女の群をあわせてみると、男・女の別を問わず、ある特定の年令群だけに有意な項目がいくつかあることが注目される。男・女の中学群だけにみられる「現実的」はこの年令だけに男性の役割特性として認知されている特徴的な次元のようであり、他方「理性的」は男女ともに大学群だけが男性の特性として認知している項目である。「現実的」という特性がなぜ年少段階だけに有効なのかは明らかでないが、後者についてはいくつかの背景が考えられよう。思考ことに抽象的推理能力の発達の研究は青年期のある時期を画して、それまで性差がなかったものが、男子が女子より優位を占めるようになり、以後この能力に性差はずっと存続する事実を明らかにしている (Kostik, 1954)。これが何によるのか、男女の内因的差によるとするか、あるいは逆に社会が男女の能力に対してもつ差別的期待に応じて生ずるものとするか、はいちおうおくとして、とにかく、こうした能力差と関連して男女青年の具体的な現実の行動にある差が生じてくる。大学進学の際に理科系志望が圧倒的に男子に多く、逆に女子の文化系偏重が生ずる現象はこのひとつのあらわれであろう。自分自身の身近に起るこうした現実が、性役割の認知のしかたに大きな影響をもち、また逆に役割認知が現実の男・女のあり方を規定してゆく、というように、相互にフィードバックし合うことが考えられよう。だから、こうしたことがもっとも頻繁に生ずる大学生の段階になって、「理性的」特性が男性の役割としてより明確に強固なものとして認知されるのではなかろうか。

4. 同年令段階における男女の比較

3. で、男子、女子別に年令的変動を扱いながら、そこに見られる男子群と女子群との特徴と対照的に指摘した。ここでさらに、同一年令段階の男・女2群と対比することによって男女の相違を吟味してみよう。

まず、中・高・大の各年令段階ごとに、全34項目に対する有意差の有無に関して男・女2群の一致・不一致をみると次のとおりである。(Table 7)

Table 7

		中学	高校	大学
男子群, 女子群間で一致しているもの	両群とも有意差あり	9	14	20
	両群とも差なし	10	10	8
	計	19	24	28
男子群, 女子群間で不一致のもの	男子群のみに有意差あり	2	3	4
	女子群のみに有意差あり	13	7	2
	計	15	10	6

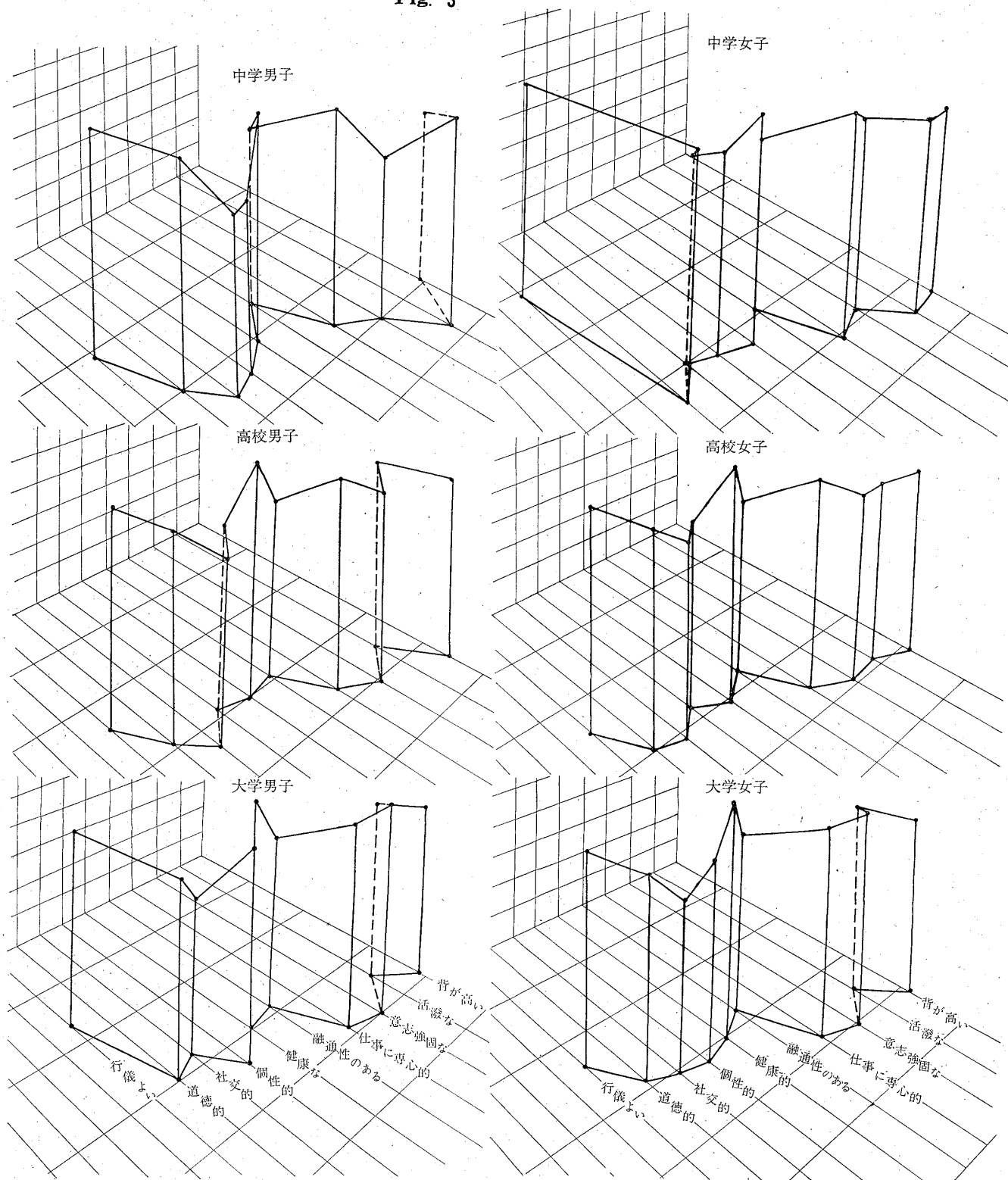
これによると、男女の一致度は明らかに年令とともに高くなる傾向がみられる。つまり低年令段階では同一年令でありながら男子と女子とで性役割の認知のしかたにちがいがあ。これは、さきに指摘したように、男女の役割を識別するのに有効な項目特性数に関して、男子では年令による変動がみられ、年少段階ことに中学では男女の性役割を識別的に認知する程度が低い事実、一方女子ではこの点に関しては中学から大学までの間に大きな変動はみられないこと、などを考えあわせれば一層明らかである。つまり男子において性役割の認知が中学生ではかなり未分化なものであることが、低年令段階での著しい男女差をもたらす原因をなしている。

ところで、同一年令の男女間で一致のみられない項目内容を検討してみると、多くの項目は同年の異性群とは不一致であっても、他の年令段階の同性群、あるいは異性群のいずれかと共通する項目であり、同年の異性群とは差があってもその群だけに固有なものとはいえない。ただわずかに、高校男子群における「質素な」(男性的特性として)、大学男子群における「理想をもった」(男性的特性)、大学女子群における「謙遜な」(女性的特性)、だけは、同年の異性群のみならず、他のいずれの群においても有意な項目ではなく、それぞれの群だけが男性あるいは女性の役割として独自に認知している特徴的な次元だといえよう。ただ、これが当該群に属する被験者が代表するある年令・性の青年層の一般的特徴を示すのか、あるいはここで用いた各群のサンプルの特殊性を反映したものかはきめがたい。おそらく両方の可能性が含まれていると思われる。

同様に項目内容を対応させてみると、いずれの年令段階を問わず、共通して一方の性の群だけにしか認められない項目も存在する。「女性を認める」がこれで、女子3群には著しく大きな差をもって男性に望ましい特性として認められているのに対して、男子では、いずれの群においても有意差はみられない。ところでこの項目は、男性について「女性を認める」特性と、女性について

「男性に一目おく」特性とが対をなしている。ここで「女性を認める」評定が「男性に一目おく」評定よりも高く、かつ両評定間の差が大きいほど、女性の立場が認められることを主張し男女の対等を求める態度であることを示すことになる。逆に「男性に一目おく」方がより高ければ、男性優位を認める立場

Fig. 3



であることになる。ここで得られた評定結果は、いずれの群においても男性への「女性を認める」評定がより高くはあったが両評定間の有意差は男子群になく、女子群にしかみられなかった。このことは、女子において男女の対等性を求め、「女性を認める」ことを男性の役割として強く期待していることを示しているのであろう。現実の生活のなかで女性は必ずしも対等ではなく、認められない欲求不満を体験しているゆえに、一層強くこの役割期待を男性にもつのであろうか。

5. 評定の絶対値との関係

これまで、性役割認知の様相を男女両性に対する2評定間の差およびその方向からみてきたが、この場合、各評定はそれぞれ絶対値を異にしている。たとえば同じく男女両得点間に差がないといっても、どちらにも等しく高く望ましいとする場合と逆にどちらにもそれほど望ましいとしない場合とがありうる。また、差が存在する場合にも差の認められない場合にも、その特性がどの程度の望ましきで評定されたうえでの差の有無であるかが問題になる。このような各項目に対する評定の絶対値を考慮しながら差を問題にすることも必要だと思われる。

いま、そのような分析のひとつの試みとして、Fig. 3が作成された。これは垂直の壁に評定の絶対値*を、底面に男・女両評定間の差をとり、立体図法により両測定値の関係を表示したものである。

いま6群の特徴をみるために、6群いずれにおいても共通の結果が得られた項目、すなわち、いずれの群でも男女得点間に有意差が認められた項目5個、および逆にいずれの群でも両得点間の差のない項目5個（Table 3参照）、計10項目がとりあげられた。これら10項目は男女得点の差の有無に関しては6群いずれにおいても一致した結果が得られたものであるから、そのかぎりではどの群においても男女の役割を識別するのに等しく有効なあるいは無効な特性といえた。しかし、いまこの図で試みたように評定絶対値もあわせてみると、各群における得点の絶対値と差の大きさとの関係は必ずしも一様ではなく、各項目のもつ意味は群によってやや異なることがわかる。すなわち、同一群内ごとにみて、差の有無あるいは差の大小をその評定絶対値との関係は項目ごとに異なり、かつ、他の群と比べたときも両者の関係はそれぞれ異なっている。たとえば、どの群にも等しく男性に望ましい特性として有意な差をもつ項目「意志強固な」は大学生男・女の評定絶対値は大きく非常に高く期待され

ているのに対して、中学用ことに男子群での評定絶対値はずっと低い。また、どの群にも差のなかった項目「道徳的な」は、年長段階に比べて年少の中学群での評定値は高く、この特性がより重視されていることを示している。

以上指摘したような二・三の点を考慮すると、各群の特徴を、これまでの差の有無、大きさ、方向からの分析に加えて、差と絶対値との関係という視点からみる必要がある。そのためには、Fig. 3の立体図法的表示はそのひとつの試みであり、さらにここから適切な代表値を求めて群間の厳密な比較を可能にすることも、今後工夫されるべき点であろう。

しかし、元来、各項目に対する評定値の大きさそのもの、つまり被験者が各項目に対してもつ評定強度を問題とすることは筆者の関心外であった。むしろ、同一項目特性に対して、同一被験者が与える男性への評定と女性への評定との関係ないしは両者間のずれに関心があり、そのために評定強度そのものの検討にはふれず、もっぱら差の観点から検討を行ってきたのであった。このような立場からすると、いま指摘したような、差を絶対値との関係からみる見方を工夫するよりも、むしろ、評定強度を考慮することなく、差の得点だけから一義的な性役割の認知構造を捉えられるような工夫こそ望ましい方向かもしれない。そのためには、今回用いたような、男女につきそれぞれ評定を求めて比較し、両評定から差を求める手続きではなく、差そのものを直接評定させ、求めるやりかたもひとつの方法であろう。また、従来の手続きによる場合、さらに広範な項目のなかから評定強度が等しい項目を選出、整備してゆくことも必要と思われる。

また、最初に、青年期における性役割の認知が、受容的な年少の時期から、いったん拒否的反発的な時期を経てのち、ふたたび受容的なものへと屈折的に変化してゆくであろうことを想定したが、この過程については本研究結果は十分明らかにしてはいない。ただ、各発達段階によってまた被験者の性に応じて、認知のしかたにたしかにある相違が存在することは見出された。この年齢・性を異にする被験者群間の相違が、はたしてさきに想定したような発達の方向と重なりあい対応するものかどうかは、今後に残された課題のひとつであろう。明らかに青年期を終った年齢層（成人）についての資料を得て、ここでの結果を対照させてみることで、あるいは、各年齢段階の青年から性役割についての自分自身の認知と世間一般での認知との評定を求め、双方のずれを検討することなど、いくつかの方向が考えられる。

* すなわち7段階尺度上いずれの点に評定したかの値。

要 約

パースナリティーの発達, ないし社会的適応のひとつの重要な側面である性役割学習過程が, 男・女の性に対してそれぞれどのような役割特性を認知しているかの面から問題とされた。ことにこれが自我に目覚めて外的權威に反発する時期を経て社会的人間へと転じてゆく青年期にどのような変化をたどるか, また自身の性によって認知のしかたにどんな相違があるかが検討された。

性役割特性を示す形容詞群から成る質問紙を用い, 男・女両性についてそれぞれの特性がどの程度望ましいかの比較・評定を求めた。そこから男・女両役割得点および両得点差が求められ, 男女をどのような差で役割分化させているかが検討された。

その結果, 次の諸点が指摘された。

(1) 全34項目中10項目については, 全被験者群によって同様な結果が得られ, 被験者の性・年令の差を問わず認知のしかたにある共通する面の存在することが示された。

(2) 一方, 他のいずれの群とも共通性をもたず特定の1群だけが性役割の分化にあたって有効とする特徴的な点もいくつかみられた。

(3) 一般に, 男性に対しては役割特性が明瞭であり, 多くの特性が付与されている。これに比べて女性役割特性はより少なく, ことに年少段階では明瞭に認知されがたい傾向がある。

(4) 被験者の性によって, 中学生から大学生にいたる間の年令による変動のしかたには相違がみられた。すなわち,

(a)男子では, 男・女両役割の分化の程度に著しい年令差

があり, 年少段階ではわずかな特性でしか性役割は区別されておらず未分化である。年長になるにつれて男・女役割両割はこまかく明瞭な差をもって分化してゆく。

(b)女子では, 男・女両役割を識別するのに有効な項目特性数に関しては年令差はみられない。しかし内容的にみると, 何が基準となって識別されているか, 女性役割特性が明瞭に積極的に捉えられているか, などの点で, 年長段階と年少段階との間には相違がある。

(5) 低年令段階では男子と女子との間に認知のしかたに差があるが, 年長段階になると性差は小さくなり, 男・女群間の相違は小さくなる傾向がみとめられた。

(6) 男・女両役割得点差と評定の絶対値との関係から各群の特徴が吟味され, 今後とるべきいくつかの分析方向が示唆された。

文 献

- Bandura, A. 1962 Social learning through imitation. Nebraska Symposium on Motivation, X, 211~269.
- Bandura, A. et. al. 1963 Vicarious reinforcement and imitation learning. J. abn. soc. Psychol., 67, 601~607.
- Bennet, E. M. & Cohen, L. R. 1959 Men and women personality patterns and contrasts. Genet. Psychol. Monogr., 60, 101~153.
- 柏木恵子 同一視に関する最近の研究 1966 教育心理学研究 14, 230~245.
- Kostik, M. N. 1954 A study of transfer: sex difference in the reasoning process. J. educ. Psychol., 45, 449~458.
- Maccoby, E. E. (ed) 1966 The development of sex differences.